

『二十四孝』

中国における二十四編の孝子説話を集めたもの。そのような孝子説話の集成は、元代の郭居敬撰の『全相二十四孝詩選』に始まって、以降の『孝行録』や『日記故事』などに受け継がれた。その人と配列の順序には諸本で異同があるが、郭居敬によれば、虞舜、漢の文帝、曾参、閔損、仲由、董永、子、江革、陸績、唐夫人、呉猛、王祥、郭巨、楊香、朱封昌、黔婁、老萊子、蔡順、黄香、姜詩、王褒、丁蘭、孟宗、黄庭堅らであり、仲由と江革のかわりに張孝と田真を入れたものもある。この『全相二十四孝詩選』などが、南北朝時代に五山の禅僧によって取り入れられ、室町中期以降に御伽草子に作り上げられた。

[参考文献]

御伽草子集 / 大島建彦校注・訳：小学館，1974.9 918/25/36 0074103182
“二十四孝”，日本大百科全書(ニッポニカ)，JapanKnowledge，
<http://japanknowledge.com>，(参照 2014-10-25)

二十四孝①

王裒(おうほう)

王裒は、嘗陰という所の人である。父の王義が、意外な事件によって、帝王のために刑に処せられ、死んだのを恨んで、一生の間、その方角へは向かって座らなかったのである。父の墓所に座って、ひざまずき礼拝して、柏の木にすがりついて、泣き悲しむうちに、涙が降りかけて、木も枯れたということである。母は、日ごろ雷を恐れていた人であったので、母が死んでしまったのちにも、雷の鳴り響いた折には、急いで母の墓所へ行き、王裒はここにいますよと、墓の周囲をまわり、死んだ母をカづけた。このように、死んだ後まで孝行をしたことによって、親の生きているときの孝行までもおしはかれるのであるが、それはめったにない優れた事である。

[参考文献]

御伽草子集 / 大島建彦校注・訳：小学館，1974.9 918/25/36 0074103182
p. 313-314より引用